

最高学部

2021年・2022年度生活経営研究実習報告会

神 明久

生活経営研究実習とは、自由学園最高学部(大学部)1・2年生の必修科目であり、学生は6つのグループに分かれ、自由学園の運営に直接かかわることで、課題発見・解決のプロセスを実践的に学ぶ。また、そこで得られた知見を通して、社会の問題について考え、後期課程での研究活動に生かすこともこの講義のねらいの1つである。以下に、2021年度・22年度の実習の活動内容について、実習報告会の内容から述べる。

1. 2021年度報告会について

自然環境・庭園 樹木グループ

樹木グループからは、まず毎年行ってきている学園内外の樹木の剪定や伐採と学園内の果実の収穫などの実際について報告があった。人数の関係から今年度は資源エネルギーグループもこの活動に参加した。各グループ間の協力体制を考える上で一つの試みとして意味があったと考えられる。続いて、門松作りに関しては、例年と同様に縄とこも以外は学園産の材料を使用し製作が行われたこと、果実に関しては収穫では、6月に梅を80kg、11月から12月にかけてはゆずを30kg、1月には夏みかん53kgをそれぞれ収穫したとの報告があった。また、今年度行った座学については、その中から土壌についてピックアップし、学園の地表表面の標本を作り、どのような構成になっているかを詳しく調べまとめたものが報告された。

農芸グループ

農芸グループの発表では、まず野菜を栽培する活動に関わる2つの点について報告があった。1つ目は学園全体の食材の発注や調整を行っている食糧部と互いの情報を交換することで、具体的には生産のペースと学内で使用する食材の量が一致するように工夫した点についてだった。もう1つは、栽培計画の見直しについてで、ブロッコリーを例に挙げ紹介した。また、温室の温度管理についてデータをクラウド管理していること、花壇のサポートの様子、コンポストの設置についてなども報告があった。

自然環境・庭園 草本・灌木グループ

草本・灌木グループは、南沢キャンパス・向山緑地・立野

川源流域での観察記録と保全の取り組みについて報告があった。観察記録では、温度等の数値の記録に加え、定点での写真撮影による年変化の記録の様子も紹介された。また、保全活動では、特別外来種の除去の実例や、この1年間でやってきた移植や手入れ、播種実験などの活動内容が紹介された。

食グループ

食グループは、保存食作りやオリジナルメニューについて報告があった。保存食作りではキャンベルを使用したブドウジャム作りを取り上げ、生産者に直接会っているいろいろな情報を知るところから活動を始めたことが紹介された。また、オリジナルメニューの開発では、学園内で収穫物を使った加工品を料理に活かす工夫や植物性の食材のみを使用したメニューを開発したことなどが報告された。

資源・エネルギーグループ

資源エネルギーグループは今年度の取り組みとして、農芸ガラスハウス内の自動散水装置の改良やコロナ対応ツールの製作について報告があった。中でも、消毒用アルコールを自動的に噴霧するボトルプッシャーの製作は、1年生で習得した電子回路やCADなどの技術を総合的に活かしたものだ。制作した装置は、現在も学部食堂で稼働中である。

図書・記録資料グループ

図書・記録資料グループでは、図書館の機能及び記録資料に関する理論を学ぶ一方で、利用者に図書を勧めるブックトークや蔵書点検も行っている。1年生からは、その

ような実践的学びの紹介に加え、デジタルアーカイブ「自由学園100年+」のモニタリング調査について報告があった。2年生は1958年から1969年までの学園新聞のデジタルアーカイブについて、記事のPDF化とキーワード検索の機能の付加について報告があった。

2. 2022年度報告会について

自然環境・庭園 樹木グループ

樹木グループでは、例年行われている学園内での樹木の剪定などに加えて、今年も桜の葉やタケノコなどの収穫を行い、それらは加工されて学園の食事に使用された。

また、座学に関しては、1年生は樹木名前覚え、樹木調査など、2年生は土壌や施肥についても学んだ。特に今年初めて、西東京市にある柏木農園の見学を行った。柏木農園では、男子部の落ち葉と米ぬかでたい肥を作り、それを使って野菜を生産し、さらに直売所で販売しており、学園の落ち葉と社会のつながりを直接感じる機会となった。また、フェノロジーとして、学園内の樹木13種、20本を週一回の頻度で観察し、葉や花の状態を記録してきた。この積み重ねてきた記録より、例えば学園内の2か所の金木犀の開花時期を7年間観察した結果、2020年と2022年は開花が遅いことがわかったとの報告があった。その他、新宿御苑の見学なども行った。

自然環境・庭園 草本・灌木グループ

草本・灌木グループでは、今年度も野草の観察と手入れ、自然観察会の開催、環境フェスティバルへの参加、2022年度に見られた植物のまとめ、外来種の除草、移植栽培実験(クサボケのロックガーデンへの移植)などを行った。また、アメリカオニアザミの各部への周知を図るため、掲示板を活用した取り組みも行った。それらに加え、今年は特に記念講堂前の自然観察区の世話を丁寧に行った。また、池の上流(取水側)と下流(排水側)の水温の変化を記録し、1年間の変化について説明があった。向山緑地・立野川源流域については、植物の観察記録や湧水についての観察記録が紹介された。

食グループ

食グループでは、1年生の主な活動内容として、学園内でとれた食材の加工やメニューの開発として、間引き大根や菊芋を使用したレシピを学生が考案、実際に学部の昼

食に出したとの報告があった。2年生は、おからを使った加工食品を考案し、しのおめ茶寮で販売した。利用者から高評価を得られたとの報告があった。

資源・エネルギーグループ

資源・エネルギーグループでは、1年生の主な活動として設備の修繕とそれに必要な技術や知識の習得、秋期は実習のまとめの報告会の資料作りを通し、紙面制作の技術習得だけでなく、制作に関する計画の立て方や、他のグループとの様々な調整についての学びが紹介された。2年生からは実習棟閉鎖のための移転作業や新たな設備の設置に関する報告があった。また、12月に設置したクリスマスイルミネーションの制作を通して1年次に学んだ技術の活用、さらに2年間で学んできたことなども述べられた。中でも、様々な設備の修繕や制作をただの作業としてではなく、使う人や関わる人のことを考えながら行うことが重要だという言葉が印象に残った。

農芸グループ

農芸グループからは、野菜栽培実績、花栽培実績、花の活用、発展活動の4点の報告があった。新天地では、毎年・中等科生が野菜の栽培を行っており、学部生はそのサポートとして実際の指導に加え、栽培計画や種苗の購入などを行っている。その中でも、今まで苗を購入してきたものを種から苗を作り、さらに栽培する試みが今年も行われた。自動灌水装置の導入効果などもあり、試みの結果が栽培コストの削減につながったようだ。また、花の栽培に関しても同様の取り組みが行われ、こちらも成果が得られたとの報告があった。さらに、通常行っている活動を社会につなげるという目標のもと、初等部の児童を対象とした、花束づくり体験が行われた。このことを通して、多くの初等部生に新天地とその活動について知ってもらうことができた。

図書・記録資料グループ

図書・記録グループについては、1年生からは例年行っている図書館学概論や製本実習などに加えて、シンポジウムの参加やinstagramの開設など新しい取り組みについて報告があった。特に、instagramの開設については、以前から行っているホームページでの図書館に関する情報発信を、生徒にとってより身近なツールを使用することで関心を持ってもらえる方策として考え実行した。今後の発展が期

待される内容だった。2年生からは、1年間通しての共通課題として、学園の生徒学生が行っている手書きの記録文化に着目し、なぜ、自由学園では手書きの記録文化が続いているのかについての調査・研究の報告があった。具体的には、生活表及び生活帳の変遷、戦争期少女日記から見る平時から戦時への学園生活の移り変わり、自由学園女子部における手書き文化の現状調査と題して、過去の資料に当たりながらそれぞれの角度から自由学園の手書き文化と日々の生活の記録の関係を調べた。

おわりに

2021、2022年の2年間を通して特筆すべき点は、やはりコロナの影響であろう。生活経営研究実習は、実際に活動をしながら学ぶことに特徴がある。そういった意味で言えば、オンラインや座学からの学びも有効な面はあるとしても、実物を手に取り、学生同士が直接かかわる中で活動が行えない時期があったことは、大きな痛手だった。また、2021年に関しては、進学者減による学生数の減少も拍車をかけ、学園の運営の一翼を担う活動も厳しい状況に陥った。しかし、4年前から学生の発案により始まった自分の所属するグループ以外の活動に携わる合同実習が、その状況を乗り越え、新たな展開を育む1つのきっかけとなった。具体的には、以前にもまして互いの活動を助け合うことで、人数不足を補うだけでなく、他のグループの活動を通して、自分たちのグループの特徴や大切にしていることを改めて振り返ることができている。今回取り上げている報告会も、そういった意味では何が大切なのかを再認識し、普段は気が付かない視点で自分のグループや他のグループの活動について考える良いきっかけにもなっている。

ここ数年来、報告会の最後には、学園長による講評の時間が設けられている。そして、生活経営研究実習が自由学園らしい活動で、学部の1、2年生の時に学校を自分たちで作るといことが実感できるこの活動は大変重要だという趣旨の言葉が語られる。一方で、実習での問題解決を通して、社会の問題にも向かい合っていてほしいし、そのことが実習の更なる発展につながるとの発言も聞かれる。今後、それを実現するために、どのようにこの活動を発展していくべきか、指導者だけではなく、参加する学生も含めこのことについて考え続けていきたい。

参考文献

神明久(2022)“2021年度自由学園最高学部生活経営研究実習報告会について”，生活大学研究 vol.8:118-120.